

内閣府だより

沖縄科学技術大学院大学新研究施設開設

管理棟(写真左)と第1研究棟



沖縄科学技術大学院大学の平成24年度の開学を目指し、恩納村においてキャンパス整備が進む中で、今年3月に第1研究棟及び管理棟の供用が始まりました。去る3月28日に、同大学の準備組織である独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構（OIST）により、国や県、市町村の関係者等、約300名の方々が参加して、「沖縄科学技術大学院大学新研究施設開設記念式典」が開催されました。

式典では、まずOISTを代表してロバート・バックマン理事がシドニー・ブレナー理事長に代わって挨拶をし、関係者の長年の協力や支援に対して感謝するとともに、開学に向けて着実に歩みを進めていくことを表明しました。OIST運営委員会のトーステン・ヴィーゼル共同議長は、素晴らしいキャンパスができたことについて大学院大学を受け入れた沖縄県や恩納村に謝意を表するとともに、世界最高水準の研究者が才能ある学生を育てることで、地元にも刺激を与えたいとの抱負を語りました。沖縄県の仲井眞弘多知事からは、県民挙げて大学院大学の支援をしていくとの決意が、また、恩納村の志喜屋文康村長からは、OISTが日本の科学技術を変えていくことへの期待の念が述べられました。

新研究施設は、延べ床面積約27,000m²で、第1研究棟及び管理棟から構成されます。第1研究棟には、電子顕微鏡、質量分析装置等を集約したバイオテクノロジー実験室や、動物飼育施設、共同研究エリア、代表研究者のオフィス等が入っています。管理棟には、講義室、図書館、学務・事務オフィス等が入っています。施設整備による周辺自然環境への影響を少なくするため、建物形状を地形になじませる等の設計上の工夫がなされています。



式典の様子



質量分析器室



電子顕微鏡室



■オープンラボ

新研究施設の特徴は、実験機器やスペースを可能な限り共有化する「オープンラボ」であることです。こうすることで、分野を超えた研究者間の交流が生まれます。また、研究者のオフィスは、自由にコミュニケーションができるように互いに隣り合わせになっています。こうした工夫から、学際的な研究が促進されることが期待されます。

共同研究エリア

■環境への配慮

新研究施設には、高度な排水処理施設が備わっています。水の再利用を多くすることで、海に流出する排水量を抑制し、周辺の海域への影響を少なくするように努めています。水の再利用率は65%です。また、建物全体の90%で発光ダイオード（LED）照明を導入したことで、従来型の照明に比べて約25%の電力エネルギーを節減できます。その結果、二酸化炭素排出量を年間137トン削減することができます。

今後、大学院大学の開学までには更に2つの研究棟と周辺の関連する施設等の整備が進められていく予定です。今回の第1研究棟及び管理棟の供用開始は、沖縄県に世界最高水準の研究教育拠点を築くための重要な第一歩を踏み出したものと言えます。